

林野庁では、毎年、森林・林業白書を刊行している。この2年間、私は施策部会長という立場で、この白書の構成と内容の検討、そして取りまとめを担当してきた。一方、それ以前から、私はこの白書の愛読者でもあり、その意味での付き合いは20年近くになるかもしれない。その間、毎年白書からは多くの有益な情報を得てきたが、その中には、森林・林業や木材利用に対する私自身の考え方とそれに基づく行動に大きな影響を与えた内容もある。

緑のエッセー

その例として、今から10年ほど前、スウェーデン、フィンランド、そしてオーストリア等の西ヨーロッパ諸国から、我が国が年間300〜400万m³にもおよぶ大量の木材を製材品として輸入していることを白書の情報から知ったことが挙げられる。当時、私はこの事実を大変な驚きで受け止めた。それと同時に、我が国から遙か遠く、しかも物価や労賃が高いこれらの国々が何故に木材を我が国に輸出できるのか、また、我が国がこれらの国々から木材を輸入する必要があるか

あるのか、私は大変に興味を持った。さらに白書を読んでいくと、1990年以降に西ヨーロッパ諸国からの木材の輸入が急速に増加してきたことと、我が国における木造建築での集材材利用ならびにプレカット工法が普及してきたことが、動向として良くマッチングしていることに気づいた。その後、私はスウェーデンにおける林業ならびに木材加工や利用等の多くの現場を視察する機会を得たが、その動機も白書から得た情報に基づいている。



スウェーデンの森林には小径木が多いが、彼らはこれらを高性能林業機械で効率的に収穫して、これを巨大な製材所に移送し、ラミナ板として切り出し、人工乾燥させ、さらに貼り合わせて集材材を生産していた。製材・乾燥工程を支えるエネルギーは、その過程で副産される木質バイオマスを利用した熱電併供給型の燃焼施設によって賄われていた。また、これらの施設は大規模化された森林所有者組合によって経営されていた。つまり、スウェーデンでは、森林・林業経営の集約化を

高度に進めることによって、1990年頃には木材生産のコスト低減化と均質な製材品を安定かつ大量に供給するサプライチェーンの形成に成功していたと理解された。現在、我が国では、森林・林業再生プランの実現に向けて多くの施策が打ち立てられている。西ヨーロッパの林業先進国のような良い形と心から願っている。

さて、白書というと官庁が作成した硬い報告書をイメージされるかもしれないが、それ

は誤解である。最近の森林・林業白書については非常に読みやすく、森林及び林業の動向全体を平易に理解できるよう各所に工夫がなされている。白書は林野庁のホームページからもダウンロードできるので、是非とも、多くの人たちに読んでいただきたい。それにより、森林、林業、そして木材が社会にとって身近な存在として受け入れられるようになると思う。

●プロフィール
東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
昭和57年東京大学大学院農学研究科林産学専攻博士課程を修了、農学博士。その後、同研究科の助手、助教授等を経て、平成13年から現職
平成14年 セルロース学会賞受賞
平成20年 日本きのこ学会賞受賞
平成21年 国際木材科学アカデミー フェローに推挙
木材成分の微生物・酵素分解機構に関する基礎研究をベースとして、バイオマス変換技術の開発研究に従事している。また、平成21年から林政審議会委員を担当、現在、会長代理兼施策部会長